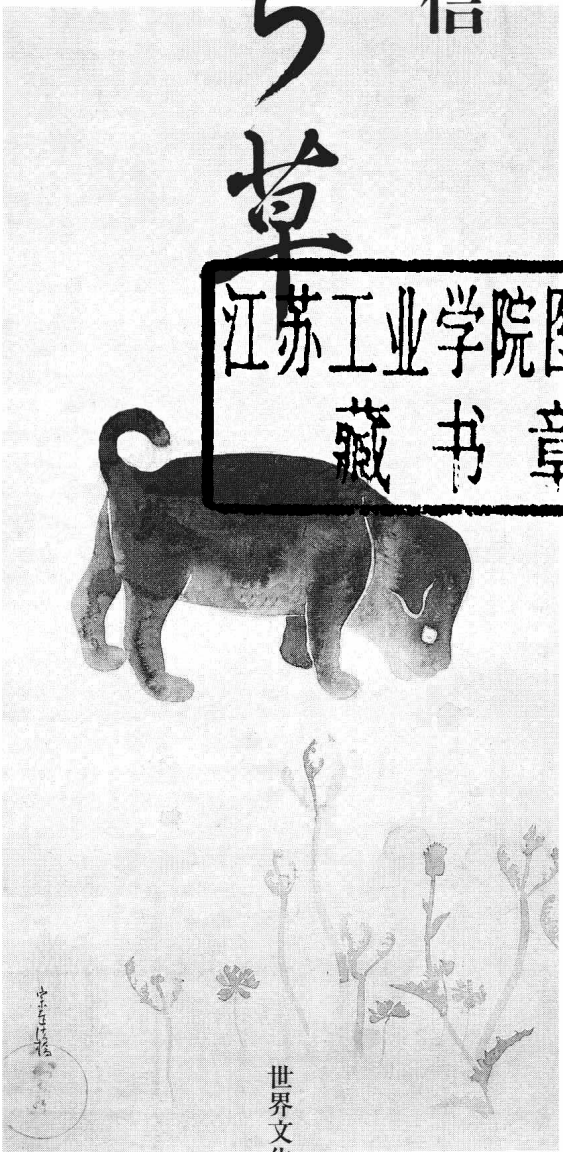
みち草

大岡信

世界文化社

みち草

大岡信



江苏工业学院图书馆
藏书章

世界文化社

みち草

一九九七年六月一日　初版第一刷発行

著　者　大岡　信
発行者　鈴木　勤
発　行　株式会社世界文化社
〒一〇二　東京都千代田区九段北四―二―二九
電話　〇三(三二六二)五一一八(編集部)
〇三(三二六二)五一一五(販売部)

印　刷　中央精版印刷株式会社
製　本　中央精版印刷株式会社　二、一〇〇円

©Makoto Ōoka 1997 Printed in Japan
ISBN4-418-97514-4
禁無断転載・複写
定価はカバーに表示してあります

みち草

目次

〈口絵〉私の非「美学」

I

俳人漱石……10
漱石の俳句……17
明治の青春——子規・漱石・虚子・碧梧桐……24
俊成・定家ファミリー……57
『小倉百人一首』について……64
伝統を受け継ぐ力——『万葉集』の驚異……81
書の古典に想う……88
道元の悟りと表現……93

II

歳時記について……100

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

歳時記のルーツ　その一……104
歳時記のルーツ　その二……123
歳時記のルーツ余聞――屏風絵と屏風歌……133
季語は世につれ……145
江戸と歳時記……152
ことのは抄……154
蛙（かはず）154　蝶 158　桃の花 160
若草 162　蟬 164　杜若（かきつばた）165
立秋 167　天の川 169
秋風 171　花野（はなの）175　凩（こがらし）176
水鳥 179　枯蘆（かれあし）180　恋 182
老い 187　ことば 192
文芸 195
III
日本人と雨……200

日本人と花……208
花の人　人の花……232
草合(くさあわせ)について……241
「鶴」の見方……248
「いろ」の詩学……252
「夢」のうたの系譜……263

IV

当世「孝行息子」気質(かたぎ)……280
餅つく面々……288
私だけの空間……300
贋作……302
硯由来……308
ばんごはん……310
ヒヨドリ……312

猫の手術……322

V

よしなしごと……326

文部省唱歌 326　甘えの理論 327
新人 328　頭の手仕事 331
若さの情熱 332　モンザエモン 333
創造的思考力 334　俳句の心臓は何 336
無名であること 337
朔太郎と社会主義 338　春夫の手紙 339
青春の暗さ 341　本作りの文化史 342
情報化け社会 343　泣きましょう 344
添削と自己表現 345
個人雑誌に敬礼 346
二人のウェルテル 347　肩書と値段 349
工業デザイン 350　暑さと涼しさ 351
短歌を作るとき 353
明治七年の記事 354

しごとの周辺……356
くしゃみ 356　追い出しコンパ 357
多わりゃいいのか 358
漱石熱のころ 359　手前勝手 360
あとがき……362

みち草

カバー・表＝上村松篁〈躑躅〉部分
カバー・裏＝加山又造〈千羽鶴〉部分
見返し＝狩野元信〈四季花鳥図〉のうち
扉＝俵屋宗達〈狗子〉
題字＝篠原榮太
撮影＝斎藤幹朗（小社写真部）
装幀・ＡＤ＝長谷川徹

写真協力＝京都国立博物館
大仙院
中央公論美術出版
フジ美術企画

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

I

俳人漱石

現代短歌の作者たちのあいだではその習慣もとみに失われているようだが、現代俳句の作者らには、まだかなりその習慣が残っているのではないかと推測されるものに、「兼題」というものがある。もとは兼日題（かねてよりの日の題という意）とも兼日とも言われたものである。歌会や句会を催すとき、連衆に対してあらかじめ出し、作品を用意させておく題のことであり、またそれらの題により、あらかじめ作っておいた句や歌のことをも言った。当日出される題は「当座」。その場で作る句は「即吟」。

たとえば与謝野晶子ら明星派歌人たちにとっては、兼題も即詠も当たり前の短歌制作の方法だったろう。

どこで読んだか、今すぐには思い出せない話題に、こういうものがある。晶子は弟子たちとの歌会の席で、当座に身の回りのものをいくつか取り上げ、たとえば、灰皿・柱時計・火箸・蠟燭といったものを題にして、何首ずつかの歌を詠むことを歌の勉強の一助として課した――というのだ。この話は、なるほど与謝野晶子の弟子教育としても、彼女自身の作歌方法の一つとしても、よく理解できると思ったのだった。なにしろ彼女は、創作量では抜群の歌人だったから。

与謝野晶子の場合ばかりではない。後年「写生」を唱導するようになる正岡子規にしても、まだ帝大生だった若き日、松山へ帰省の折、河東秉五郎（碧梧桐）、高浜清（虚子）という二人の松山中学生を、急速に俳句の道に引きずりこむことになる「競吟」を、ひと夏七回にもわたって熱心に行なった。

競吟について最も詳しいのは、碧梧桐がずっと後年に著した重要な本『子規の回想』の〈松山競吟集〉の章だが、松山近辺の三津浜の料亭などへ上がり、半日を費やして行なった競吟の催しは、要するにその季節の風物などから題を十題くらい選び、「成るべく拙速を尊ぶ句作法で」次々に句を作ってゆくやり方である。

……題にヒントを得た境地を味ひながら少し苦吟してゐたりすると、落伍者になつてしまふ。一題の句は十乃至二十位になつて、一寸出かたが渋ると、他の題を課して気分を新たにした。大抵一会合に十題位片づけてゐた。

仮に一題につき十句ずつ作ったとした場合、十題なら百句である。昼食前から始めて夕刻までやったとして、時間は七、八時間だろう。その時間内に百句作るというのは、速いか、遅いか。もちろん、現在の水準でいったら、速い。べらぼうに速い、と言っていい。第一、どの題についても、すぐ種切れになってしまう者が続出するはずである。

なぜそうなるかと言えば、まずもって、現代人たる私たちは、対象をくっきり鮮やかに、その全体像をも細部をも充分に見識っている度合が、百年前に比べれば格段に劣ってしまっていることは

明らかだからである。

たとえば蓮の花が題になったとする。早朝の蓮池で、花がポンと開くところをゆっくりと見た人は、都会ではまず一万人に一人もいないだろう。したがって、このような題を出された場合、もし花の開くさまを句にしようと思うなら、見たことのない情景を想像で思い描いて句にするしかないのである。

しかし、子規たちは、松山城の堀端などで実際にそれを見て識っていたから、何句かは、蓮の花の開く場面を、実感をもって句にすることもできたはずである。競吟という方法、和歌なら題詠という方法にも通じるこの方法は、実際はまさに「写生」の要領で実行されていたのである。

あらかじめ出題されている「題詠」は、虚構のものだから、「写生」とは全然別もの、と考え、それゆえに軽んずるという、われわれが簡単に陥り易い道筋の考え方は、実際には成り立たないのである。

同様に、即席の題を歌会や句会の席上で何題も出し、一定時間内に何首も何句も作らせる、といったやり方も、実は一人ひとりが日常座臥(ざが)の間にものを見て蓄えている「写生」の力が、厳しく試されている、試金石のようなものなのである。

それだけではない。このような場合に物を言うもう一つの、同じように必須の能力があって、それは、一ことで言えば、作者それぞれが備えている文学的蓄積や雑学の知識である。今どきではまるで権威がなくなってしまったらしい言葉を用いるなら、それが「教養」というものにほかならない。

近代の俳人を眺めてみると、そのような意味での文学的蓄積、教養を、やすらかに自分の俳句作法の中に取り込み、妙な衒学趣味を感じさせることなく、あえて衒学的境地にさえ気楽に歩み入り得た人の筆頭は、夏目漱石にほかならない。

一九〇四年（明治三十七年）十一月号、十二月号の「ホトトギス」に出た漱石・高浜虚子両名の合作俳体詩〈尼〉のような作品は、作者に人を得て実った稀代の美果だった。一連四句、全二十四連、うち漱石六十句、虚子三十六句で、数の上では断然漱石が多い。怪奇趣味、浪漫趣味においても、抒情性においても、可憐な風情においても、歴史・地理・空想・写実その他、詩歌作品が備えるあらゆる要素の動員においても、漱石は実に楽しげに駆使している。さすがの虚子でさえ、相手の想像力の活発な跳梁に、呆れながら調子を合わせ、作を進めている気配がある。

女郎花女は尼になりにけり　虚子
絃の切れたる琴に音も無く　漱石
天蓋につゞれ錦の帯裁ちて　子
歌に読みたる砧もぞ打つ　石

第一連の四句である（振り仮名は大岡）。女郎花は古来その名からして、なよなよと美しく寂しい女性の象徴の役目を果たしてきた。かの強権の人、左大臣藤原時平でさえ、

をみなへし秋の野風にうちなびき

心ひとつをたれによすらむ　（『古今集』秋歌上）

のごとき歌を「朱雀院女郎花合」で詠んでいるほどだったので、虚子がこの句を自分たちの試みようとする「俳体詩」の発句として提示したことには、充分の野心と期待があったはずである。

虚子はまず、多くの連想をよび寄せる花、女郎花を取り上げて、「尼に」なった女を描き出す。漱石はその発句を受けて、「絃の切れたる琴に音も無く」と、女の落魄ぶりを端的に描写し、また「歌に読みたる砧もぞ打つ」と、男への恋しさに耐え、孤独な境涯の尼の身で修行するらしい女を描き出す。

すなわちこの四句だけで、お膳立てはほぼでき上がったわけで、すでに雰囲気は漱石自家薬籠中の、中世ゴシックロマン風悲恋物語の世界に入りこんでいるのである。

この第一連四句を受けた第二連は、その雰囲気をさらに強めるために、仏道修行に身を責める尼の孤独な姿を描き出す。

白露に悟道を問へば朝な夕な　石
兀々として愚なれとよ　〃
板敷に常香盤の鈴落ちて　子
暫く響く庵の秋風　〃

二人の息がぴたりと合っている付合である。それぞれの個性がみごとに発揮されているのが素晴

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com